巻頭言

ポーラログラフ討論会の更なる発展を願って

千田 貢

For further development of the Polarographic Society Meeting

Mitsugi Senda

今年 6 月第 34 回 Heyrovsky Discussion (HD) に参加する機会を得た。この HD はチェコ共和国科学アカデミー主催で、同所属の J. Heyrovsky 物理化学研究所が中心になって毎年一回電気化学の研究領域から適切な討論主題を選び、その主題を中心に有意義な学術討論会を持つことを目的として計画、開催されてきたもので、今年で上記のように第 34 回になっている。今年の討論主題は Chemistry on Polarized Liquid-Liquid Interfaces であった。振り返ってみると、筆者が初めて HD に参加する機会を得たのは 1984 年で、討論主題も液/液界面の電気化学に関連したものであった。その後この主題関連でも 4、5 年に一回の頻度で開催され、そのつど筆者も参加し、勉強する機会を得てきた。

討論会は午前、午後各一件、一時間の講演発表とそれにつづく討論が基本形式で、近年はそれに続いてそれぞれ 2~3 件の比較的短時間の発表、討論が入るようになってきている。参加者数も過多にならない様に考慮されているようである。会場は科学アカデミー所有の施設が利用され、今回の会場はプラハの東南約 180 km、オーストリア国境に近い町 Trest にある古い館 (Trest Castle) をホテル形式に改造したもので、討論会用の講演室も設備され、参加者約 50 名全員宿泊し

て、快適な 5 日間であった。中間の日の午後のエクスカージョンと夕べのパーティーも計画されており、今回も中欧の古城を訪ね、ゆっくりとした半日を過ごしたことであった。残念ながら、筆者の英語力、特にヒヤリングはまことにお寒いかぎりでおまけに年とともに益々、近年は、日本語も怪しいとの意見もあるようだ)、今回の討論会でもその期待される成果を充分堪能したとご報告するにははなはだ心もとない次第であるが、それでも HD はその都度、そして今回もまた、筆者に自分たちの進めてきた研究について改めてもう一度、より深く考えてみる機会を与えてくれた。

私たちの日本ポーラログラフ学会は、1953 年電気化学協会 (現電気化学会) の研究部会としてポーラログラフ委員会が発足し、研究会また講演会を随時開催し、また会員の研究また勉強の成果の発表、また文献紹介等情報交換の場として会誌「ポーラログラフイーの研究」(年 4 回)を発刊したのに始まる。1954 年には日本化学会の討論会制度による第一回のポーラログラフ討論会 (京都) が開かれ、2 日間にわたり 30 件の研究発表、討論が行われている。ポーラログラフ委員会はポーラログラフ学会に、また会誌は「ポーラログラフイー (Review of Polarography (Kyoto))」に引き継がれ今日

にいたっている。また、討論会も「ポーラログラフイーおよび電気分析化学討論会」として今日にいたっている。振り返ってみると半世紀に近い年月が過ぎ、ポーラログラフ学会にもいろいろなことがあった。ただ、その間にあってもこの「討論会」は中断することなく今日にいたっている。これは言うまでも無く毎年世話人の諸兄姉はじめ会員の皆様の御尽力によるもので、改めて敬意と感謝の言葉を捧げたい。充実した討論会こそはその学問領域発展の基礎である。今後の一層の発展を願ってやまない。

特にここ数年来、ポーラログラフ学会は池田新会長のもと関係理事各位の非常なご努力で面目を一新しつつあるのを見ることは喜びにたえない。ご努力にたいし心からのお礼をもうしあげたい。「ポーラログラフイーおよび電気分析化学討論会」は年に一度、日頃はそれぞれの専門領域で活躍している会員が一箇所に集まり、大きな学会とは違った意味で、一年間の研究成果を中心に親しく意見を交換した情報を交換するという、ポーラログラフ学会にとってはその年会の役割も果たしており、他に变えがたい重要な意味を持っている。さらに、限られた時間と費用の中で討論会をより実のあるものにしようとするご努力と成果にたいしては重ねてお礼申し上げたい。昨年度の“温故知新”の特別企画は老年の筆者にも反省と元気を与えてくれた。Hard thinking! Work done and publish! (M. Faraday).

会誌「ポーラログラフイー」が格段に充実してきたことも喜びに耐えない。特に関係の諸兄姉のご努力にお礼申し上げたい。筆者も若いころ何度もこの会誌に寄稿する機会を与えられ、何よりも勉強になった。会員諸君、特に若い会員諸君がその研究、勉強の成果をまとめて、どしどしこの会誌に寄稿されるこ

とをお薦めし、期待したい。筆者も時間に余裕が出てくる予定でもあるので、老人にも寄稿の機会を与える制度を考えていただくよう、理事会の皆さんにお願いしてみようと思っている。会誌第1号(1953)はガリ版刷りであった。最後の頁の余白を編集後記(と名づけた一文?)で埋め、出来上がった冊子を封筒にいれ、何十冊かを自転車の後ろの荷台にくくりつけて近くの左京郵便局にむかって走った日のことが思い出される。

ポーラログラフイーの創始者 Heyrovsky (池田、本誌前号、Vol. 47、No. 1、p.39,43; あわせて筆者の拙文、ぶんせき、1999年10月号、p.829等参照)は1959年のNobel賞記念講演の最後をつぎの言葉で結んでいる(ポーラログラフイー、Vol.8、85(1960))。“Although the analytical application of polarography is highly advanced at present, the field of its utilization in basic chemical problems begins to open.”。事実、ポーラログラフイーおよび電気分析化学の研究領域は、超微量分析は勿論、電極反応速度論、不安定化学種解析、分光電気化学、超微小電極反応論、また液液界面電荷移動反応、界面および膜電気化学、in vitro さらにはin vivo 電気化学、バイオセンサー工学等へとその研究領域を広げて今日に至っている。この秋の討論会(大阪)にはさらに新しい研究成果を期待し、お元気な会員の皆様にお目にかかることを楽しみにしている。

(京都岩倉にて)